

ゆき りゅうざぶろう
生化学分野 助教 幸 龍三郎

『がん遺伝子の発見 がん解明の同時代史』
黒木登志夫 著

中央公論新社 (1996年)

がんは、今や治る病気の一つになりつつあると考えられています。その裏には、がん発症のメカニズムを解明するために奮闘した多くの研究者の努力があります。本書は、がん研究の第一線を直走った黒木登志夫先生が、がんの原因が遺伝子の異常であることが明らかとなるまでの軌跡を紹介する本となっています。学部生だった私は、それぞれの研究者のアイデアにワクワクしながら読み進めていったのを覚えています。新たなことを発見する研究者の熱意や研究姿勢は、今も昔も変わりません。多少難しい点もありますが、生物学の基礎知識があれば、ある程度読み進めることができると思いますので、ファーマシストサ



イエントイストを目指す皆さんにとって、研究が身近に感じられるような一冊になると幸いです。

本書の解説は1910年代のアメリカに遡ります。三十歳を過ぎたばかりのペイトン・ラウスは、ニワトリのがん組織をすり潰した液を素焼きの瀬戸物に通しても、がんを発症させる能力が低下しないことを見つけ、ある種のがんの発症にウイルスが関わることを発見しました。がん解明の糸口となるこの功績は大きく、ノーベル賞受賞に繋がりました。その後、がんウイルスによるがん化には、RNAをDNAへ変換する逆転写酵素が必要なことが明らかとなり、セントラルドグマを覆すこの概念は、大きな話題を呼びました。そして、ラウス肉腫ウイルスから最初のがん遺伝子srcが同定されました。さらに、がん抑制遺伝子の異常もがん化に重要であることが明らかとなりました。本書を通して、このような黎明期のがん研究に触れることができます。

現在では、様々な分子標的薬が臨床応用されるまでに至っています。研究手法の革新とともに研究領域が拡大・深化していくことで、新たな創薬介入点が見つかります。薬学では、病気の発症原理を理解し創薬開発を行い、投薬される患者さんのQOL向上に努める、という一連のプロセスに携わることができます。皆さんも、研究室に配属された際には大いに楽しみながら研究に関わってみましょう。

 事務局お仕事紹介

■ 第2弾 進路支援課

お久しぶりです。KPUnews編集委員の学生です。

今回は大学の事務局のお仕事紹介第2弾として、進路支援課を紹介します。

進路支援課は愛学館1階、POPPY寄りの入口入ってすぐにあります。5人の事務職員の方で学生の面談をはじめ、就職活動情報提供、セミナー等の企画・運営をされています。学生面談ではキャリアコンサルタントという資格を武器に、学生一人一人の強みを活かせるようにアドバイスしていただけます。

1・2年次生では労働条件理解セミナーや進路デザインガイダンス、3年次生では「医療の担い手としてのこころ構えC」の授業を担当して下さっていますが、4年次生のキャリア面談からお世話になることが多くなってくると思います。

近年の就職活動の早期化に合わせて我々の支援プログラムを組んでくださっており、全ては学生のみなさんが希望する進路に就けるよう取り組んでおられました。

進路支援課の資料ブースにはこれまでの先輩方が残して下さった有益な情報がたくさん揃っています。



熱心に資料を見る学生編集委員

我々も実際にブースに行ってきましたが、就職試験内容や体験談を詳細に記録した資料があり、たくさんの刺激を受け、モチベーションが上がりました。資料ブースにはいつでも誰でも立ち寄ることができるので、低学年のうちから自分の将来と向き合う時間を作るためにぜひご活用ください！ また、manabaやTwitterで情報発信もされており、有益な情報を得られます。一度覗いてみてはどうでしょうか？



模擬面談に挑戦！



本学公式Twitter

